

第13回ファミリーホーム 全国研究大会 in 宮城・仙台

日本ファミリーホーム協議会 東北ブロック
〒987-1103 宮城県石巻市北村字米倉 75 番地

助成事業の概要

目的：第13回ファミリーホーム（FH）全国研究大会

全国各地のFHから、そこで生活する子どもたちや養育者、また大学の研究者、行政関係者などが参加して、次のことについて研修・研究し、理解を深める。

- ・FH制度の現状と施策について／・養育者としてのスキルアップ及びFHで生活する子どもたちの理解について／・FHの運営について等

時期：2018年（平成30年）8月3日（金）～4日（土）の2日間、1日目は全体研修、2日は分科会

内容：行政説明「社会的養護の現状、並びに改正児童福祉法及び関連施策について」

厚生労働省 児童福祉専門官 島 玲志様

基調講演「新しい社会的養護ビジョンとファミリーホーム」

長野大学教授 上鹿渡 和宏 先生

第1分科会「子どもの性の問題について」（講師・助言者 宮城大学教授 桑名 佳代子先生）

第2分科会「子どもの自立支援について」（自立援助ホーム「峠のまきば」中山 崇志 氏）

第3分科会「障害を抱える子どもたちのケアについて」（「麦の子会」北川 聡子様）

第4分科会「いまさら聞けない!? ホーム運営の素朴な疑問（日本FH協議会 卜蔵会長ほか）

第5分科会「フォスタリングチェンジ・プログラム研修」（長野大学教授 上鹿渡 和宏 先生）

<子ども企画>

小学生：うみの杜水族館見学、グループ活動、縄文の村歴史資料館見学

中高生：震災ツアー・石巻市大川小学校跡地ほか、防災学習、縄文の村歴史資料館見学

「だれが」：一般社団法人 日本ファミリーホーム協議会 東北ブロック

「なにを」：

- ・1日目の全体研修では、厚生労働省の職員が制度の現状と施策について説明、大学の研究者が子どもとのより良い関係を作る方法や将来のFHの方向性などについて講演

2日目の分科会では、「子どもの性の問題」、「自立支援」、「発達障害」、「FHの運営」、「フォスタリングチェンジプログラム研修」の5分科会で、ファミリーホームの現場にいる養育者や当事者に話をしてもらい、現場の声を数多く聞き、皆で議論した。

さらに今回は2011年東日本大震災の被災地で開催される大会なので、子どもたちが、実際に津波を体験した「語り部」の方の説明を聴きなが

ら被災の現場を見学した。

事業の成果

1 全体研修

・日本の児童を取り巻く状況と社会的養護の現状、政府の施策の方向性—特に「小規模化・家庭化」の重要性と「児童虐待発生時の迅速・的確な対応」の緊急性—が理解できた。

・「小規模化・家庭化」の重要性は社会的養護の当事者の次のような声がすべてであろう。

＜施設で生活した私が施設に求めるのは「いっしょに生きてくれる人」を失った子どもたちにとって、「いっしょに生きてくれる人」が見つかる場所であってほしいということです。＞

これは、FH や里親にも求められるものであるから、それを可能とするような支援（フォスタリング機関）が必要である。

2 分科会

1～5の分科会のテーマは、皆 FH の関係者が直面している切実な問題である。

それぞれ具体的な事案に基づいた発表があり、さらに具体的な事例の紹介もあって熱心な議論が展開され、参加者の認識が深まり、視野が広がった。

3 子ども企画

中高生の震災ツアーは東日本大震災（2011.3.11）の被災地での開催だからできたことであった。

被災の現場（石巻市大川小学校）で7年前の震災のとき同世代であった「語り部」の大学生の話聞き、また、震災のとき現場で対応した方から避難所運営などの防災の話聞いて、子どもたちは、災害の恐ろしさと日ごろの備え、危機対応能力（「とっさのときにどう動くか」）の大切さをリアル感覚で認識できたことは有意義であった。

4 申請事業実施後の予想される成果

虐待、いじめ等々子どもに関係する深刻で悲劇的な事件が日々報道されており、「社会的養護」を必要とする児童の救済は急務ですが、「ファミリーホーム」はそのための有効な受け皿です。

この事業の予想される成果は、大きく三つです。一つは、それぞれの養育者の能力・スキルが向上することにより、養育レベルが向上すること。

全体研修・分科会での研修、議論、情報交換で知識・情報を得ることにより、日頃悩んでいることやそれぞれのホームのあり方などについての認識を深めることができ、また、人的なネットワークが広がりました。

二つは、社会的な関心が高まり、ファミリーホームへの支援の輪が広がること。

ファミリーホームの養育者以外に多くの関係者（児童養護施設等の施設職員、里親支援専門相談員、大学の研究者、児童相談所職員、学生、里親さん、社会的養護の中で育った子等々）の参加があり、ファミリーホームやそこで生活する子どもたちのことを知ってもらうきっかけになって、そこから支援の輪が広がるのが期待されます。子どもたちの成長を、親やファミリーホームや施設だけが支えるのではなく、関係する多くの人たちで、まさしく「社会的」に「擁護」する仕組み作りの担い手が増えることが期待されます。

三つは、子どもたちが東日本大震災の体験を当事者から直接学んだこと。

実際に被災した方（語り部）から、現場でそのときの状況を聴くことにより、震災についての認識が深まり、子どもたちの危機対応能力（「とっさのときにどう動くか」）が向上が図られた。

成果の広報、公表

・ファミリーホーム通信「第13回ファミリーホーム全国研究大会 in 宮城仙台 特集」により会

員・関係者に周知した（2018年9月）。

- ・『社会的養護とファミリーホーム』（2019年3月20日発行 市販）特集号で一般への周知を図る。

■ 今後の展開

・危機的な状況にある児童の発見と緊急保護が深刻・喫緊の課題となっている。他方、保護した児童が安全に生活できる場が確保されていないと緊急保護が有効に機能しない。バックアップの体制が必須である。

児童を家庭的な雰囲気ですぐに養育するファミリーホームはそのような保護児童を受け入れる有効適切なあり方として期待されているので、養育者の資質の向上と一般への周知が必要であり、今後も継続して開催される予定。来年は岡山県で開催。

日時：2019年8月7日（水）～8日（木）

会場：ホテルグランヴィア岡山

大会テーマ：「ファミリーホームの新たな展開を目指して」